

## 図書館資料について

荷 葉 堅 正

### 一

図書館資料は一般にその形体から種別して(a)図書資料(b)図書以外の資料の二種類となす。その中、(b)で示す図書以外の資料というのは単行本以外の全ての資料を指すものであり、それが具体的に何を指すかという点、それを解説する人によって多少相違するが、普通には逐次刊行物、パンフレットや視聴覚資料が含まれるという。(a)の図書資料は単行書であり、普通に書物といわれるものである。一七五五年頃の辞書は、「図書は吾々が書き、読む所の冊子である」<sup>①</sup>と定義しているのを始めとして、それに類する定義が多くなされたが、何れも図書の形式的な一面を捉えたものであり、書誌学者をして、極めて定義し難いといわしめたものである。その種の定義は、また図書を利用する人にとつ

てもそれに適したものとして了解出来ない多くの範例を見るのが常である。それは図書の形式・形態が時代の変遷とともに変わって行くからである。しかしその形式を貫く定義をなすことが困難であつても、その困難であることが、重要な意義を表わすことにもなる。図書はその時代の生活の水準を示すものであり、文化現象の一つでもあるといひ得る。

これに反して利用する人にもよく理解される意義はその内容的な一面をとらえたものであり、図書は、文字とか絵画で記録された知識であり、それを伝播させ保存してゆく重要な道具である。<sup>②</sup>というのがそれである。これは、知識を伝え、情報を伝える道具・媒介として図書を見てゆくことに中心が置かれていて、前者に比して如何なる観点から見ても、如何なる資料に適用しても善く理解される。

しかし理解され易いからといって、それだけで図書を考

察することは出来ない。形式を離れては内容もあり得ないという関係だけでなく、前述の如く形式的な側面(体裁)の文化的価値を考慮すれば、図書の考察は、その内容と形式の両面からなさなければならないということになる。

図書館ハンドブックは、学者の説を引用して「図書は、文字によって記録された人類の思想や、知識や、広く文化を、長い歴史を通じてコミュニケーションする役目を果すものである」<sup>⑥</sup>という。しかも斯うした定義づけによって、(b)に示す如き視聴覚資料等をも図書館資料に含ましめる理由づけとなっている。

図書を知識・情報を伝える道具・媒介とし、文化を保存し伝達してゆくことに中心を置き、それがそのまま図書資料でない視聴覚資料等をも図書館資料として説明してゆくという意図が見られる。またそこに示される近代の学者によってはこのことが理論的中心課題をなしていたように思われる。

図書館の機能とか意義を考察しようとすれば、そのことが当然考察されねばならぬし、図書館の司書の職能を追求して行くと同じようにそのことが考察されて来る。

そしてそれが図書館学の理論的一面の基礎となっているように思われる。<sup>⑦</sup>

図書館の機能や存在の意義を広く人間の文化環境の中で考察しようとするのと同じく図書についても、学者は、

「図書は民族の記憶を保存する社会機構の一つであって、図書館は生活する個人の意識にこれを伝達するための社会施設の一つである。」

(Books are one social mechanism for preserving the racial memory and the library one social apparatus for transferring this to the conscious of living individuals. P. Butler: An Introduction to Library Science. p. 1)

と述べて、図書を知識・情報を伝える道具・媒介とする意義をさらにすすめて、その上に文化伝達の意義を考察して、前述の形式と内容の両側面を包む意義を考察している。

このことが具体的には、一つの資料が、知識・情報を伝える道具であったものが、直接の知識そのものであり、工芸作品や、考古学の発掘品と同じく文化史研究の対象ともなるということと、原資料と原資料に容易に接し得るようになる二次資料の考察が必要になるという二つの事柄が問題となって来るのである。

そのことを吾々が了解するには、次のような点を考察すると一層よく理解される。

## 一、現在の図書館の機能と活動

二、現在の学問の進展と、それにとりまう資料群の増加と拡大

## 三、図書館の歴史・図書の歴史・文学の歴史

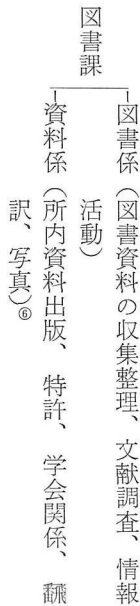
## 四、近代の文献研究の成果と意義

(一) 現在の図書館は大別して公共図書館、学校図書館、大学図書館、専門図書館の四種があり、

公共図書館の組織の代表的なものは、



であるが、専門図書館のあるものは



ここに示される専門図書館は自然科学関係のそれであり、極めて専門的な一事例であるが、図書に関する役割が非常に少く、それに反して情報に関する役割が多く、公共図書館で全体として見られるような図書の役割が専門図書館では、一部としてしか見出されない。

これが研究の進展した形であり、斯うした傾向がどの図書館にも一部内含するものであると見なければならぬ。  
(二) については最近の資料群の増加はおびただしいものであり、その範囲も拡大され、ある研究図書館では全資料を次の如く分類している。<sup>⑦</sup>

## A 原資料

一、定期刊行物 二、学術機関の継続的刊行物

三、特許文献 四、博士論文その他報告集

## B 二次資料

一、定期刊行物（原資料からの編集、要録索引、抄

録、批評など）

## 二、書誌

参考図書、教科書、概論書

こうした分類の仕方はなお、多くの問題があるし、二次資料という分け方も、現在盛んにいわれている一次情報源二次情報源ということと相違はあるにしても<sup>⑧</sup>二次資料を分類しなければならぬ程資料群の増加と拡大が考えられ、それらを貫く意義を考察して、その上に図書の定義を考えなければならぬ。

それと同時に一般図書といわれるものが、この分類においては原資料を能率的に知らせる二次資料として分類され

て、書誌と同じように分類されていることが注意される。

また因みに概論書や、ある主題に関する理論書が参考書や書誌と同じく二次資料として分類されることは、後に問題になる図書選択に関しても重要な意義を有し、それらに示される文献が最も確実な条件で原資料を指示するものといえる。

(三)については、図書館の歴史・図書の歴史・文字の歴史によって考察される原初的な形態のそれらの持つ意義によって善く理解される。

(四)は(三)の中に含まれることでもあろうが、普通図書館学の領域では余り問題にされなかったことであるので、此処に取り上げて見たい。

近世になってエヂプトにおけるギリシャ語(及び少数のラテン語)のパピルスの発見によって、古い書物の実例があたえられただけでなく、それらの研究は多くの新知識を伝えている。また従来確認出来ずに居た事に確証をあたえて、古代の書物研究に光明をあたえたといわれる。

またインドにおける碑文(阿育王の詔勅を始めとする)の発見と研究がインドの文字の実例をあたえるだけでなく、インド古代文化解明にあたえた新知識と新しい確証は重要な意義をもつものであり、そうした意義が図書の持つ

意義と同一の傾向に考察されるものであるといつてよい。

しかし同じ傾向の意義で考察されるものであつても、インド文献資料と碑文等の間には、情報源として価値に差異があり、碑文等の考古学発掘品等が一番確実視され、文献資料のそれは、第二に数えられる如く、図書の中にも一次資料、二次資料という区別が生じ、しかもそれが移動して行くことは資料群の増加に対向する確実な理解の仕方ともいい得る。

#### 註

① 田中敬著 図書字概論十三頁

② 同著 同頁

③ 長沢規矩也著 書誌学序説五一六頁

④ 劉国鈞著「中国書史簡編」第一章参照

この書には松見安道氏の和訳、「図書の歴史と中国」があり、今はそれに依つてゐる。その第一章「図書の社会的意義」において解く図書の中、内容と形式に分けて図書を考察してゆく仕方に準じてゐる。

⑤ 日本図書館協会編 図書館ハンドブック 二二八頁参照

その引用文献は視聴覚資料の総論の意義を説く最初に見出され、バトラー(Butler, P) シェラー(Shera, J) ティン(Martin, I) 等の著書に……を引く。

Pierce Butler: An Introduction to Library Science. 1933. Chicago & London.

Pierce Butler: Librarianship as a Profession.

[The Library Quarterly: 1951. 10]

Pierce Butler: Cultural Function of the Library

[The Library Quarterly: 1952. 4]

永田正男・図書館学の基礎づけのために〔季刊図書館学一  
巻四〕

⑥ 日本図書館協会編ドキュメンテーション、三二頁

⑦ Mellon, M. G.: Chemical Publications. 1940. p. 15

⑧ 椎名六郎著 図書館学概論 七三頁

そこで示される一次、二次の分割と本文で取りあげたもの  
との間に相違があるように思われる。

⑨ F. G. Kenyon: Books and Readers in Ancient Greece  
and Rome. 1932. Oxford.

高津春繁訳 古代の書物、参照

## 二

図書資料の選択を如何になすか。どのようにその原則を立てるかということには、種々の困難が生じて来る。しかも公共図書館と大学図書館・専門図書館を含む研究図書館との間には基本的な相違があるので、一つの原則を全てに適用することは困難である。ある分野に限られた専門図書館では、その専門の研究や調査の資料を集めることに中心を置き、専門の書誌を作るといような取書の仕方をするので、原則を立て易いが、公共図書館のそれは非常に相違をして複雑な様相をなしている、以下そのことを考察して見たい。しかし専門図書館に於いてなされる書誌的な取書の仕方が、公共図書館の中に於ても、一部分に要求さ

れて来ているし、それが徐々に強まって行っているが、何処までいってもその仕方ではなし得ないものが残り、それが公共図書館の重要な役割をなすともいわれよう。

図書を選択する理論として、(一)教養書中心説、(二)社会需要供給説、(三)社会調査説、(四)文化機能論の四を挙げることは、すでに定説ともなっておる。<sup>①</sup>

しかもこれが図書選択の理論だけではなく、図書館の目的を現わす基本的なものと結びついていることは云うまでもない。―文化機能論という言葉からしても―

第一の教養書中心説はエドワーズの「図書館の回顧」(Memoire of Libraries. 1850—1885)に始まるから、最初の学説であるといえよう。つづいて、第二、第三、第四の学説が出現するのであるが、第一の教養中心説に於いても、前出のエドワーズ(E. Edwards)が主張する古典や哲学・宗教の図書を基本書として選ぶべきであるという考え方が、そのまま、次のダアナ(J. C. Dana)に於て主張されたのではなく、閲覧の状況、利用者の状況の調査が図書選択の重要な一条件として数えている。また第二の社会需要供給説にあっても、この説の主導者であるマッコルヴィン(L. R. McColvin)は社会の需要に基づいて図書は選択するべきであると主張し、それと同じく需要なくとも

教養書や参考書の必要が主張されている。それ故にその一々が主として主張する傾向によって、独自に図書選択が行なわれるものではない。その何れもが選択の要因として考えられねばならない。第四の文化機能論はこれらの総合を意図したものに外ならない。

前出のバトラは図書館学序論<sup>③</sup>において、

「図書館学は、特に図書館の機能の根本的現象すなわち、社会に集積せる経験を、図書という媒介によって個人に伝達するという合理的方面を包含する。しかしその反面この伝達には科学的に把握されない他の面を持っている。

……資料の内容に含まれたものが、人間に受けとられた場合の主観的反応の再生作用は、科学的に調査することは出来ない。ここにおいて科学の方法は、副次的意味になり、有用な道具として役立つに過ぎない。……図書館学は教育や医学と同じようにその主観的性質のすべてを見失うことなしに、科学的となりうることを希望している」と示し、図書を知識・情報を伝える道具・媒介とだけ解釈せず文化伝達の道具として規定し、選択理論としては、古典・教養書等の社会要求に関係なく選ばるべき教育的、文化的図書を考えているといえよう。

なお一層おしすすめて図書選択を実際に行う場合の問題

をとりあげて見ても、同じようなことが考えられる。

図書は図書館利用者のために選ばれるべきであるということは明白なことであるが、ここにいる図書館利用者を現在の利用者だけでなく、潜在的利用者の何れをも含めてゆくと、その図書館は、その地域社会の全員に図書選択の責任を負うことになり、その図書館独自の原則が生じ、それを一層積極的に推しすすめると、全主題に渉る図書を広範囲の一般的原則に基づいて購入しなければならないということになる。

しかしこうした蔵書計画の一般的原則に立って、図書購入をなす場合、その購入した本が地域社会の人々の興味を引かない本であり、しかもその購入によって、地域社会の人の興味も引き、善い内容をもった別の本が現れても、限られた予算では購入し得なくなるといふ現実<sup>④</sup>に相会すると、一般的原則に基づくという主張に何等かの変化が生じて来て、最も確実なものは、要求があるということになり、その確実さという点を考えると潜在的利用者等を意識することは出来ず、専ら現在の読者が求めている本の供給に集中することになる。しかし如何に現実の利用者の要求が確実な事象であり、それが中心になるとしても、基本図書として利用者の要求以外の本もいくらかは購入することがせ

まられ、両者の比を決定しなければならないし、要求そのものも吟味しなければならない。しかもその比を決定し、要求そのものを吟味する根拠は蔵書計画の一般的原则ということになる。公共図書館の目的である地域社会への奉仕という課題に対して最も確実な条件である利用者の要求と一般的原则との両面から図書選択は考察さるべきであるといえよう。もちろん利用者の要求が量的に拡大され質的に改善されてゆくことが望ましいことであり、そうなることによって一般的原则に近づくことになるが、現実においてはその両者の調整が必要であり、その調整が図書資料を地域社会における重要な教育資料とする考え方の上に要請されて来る。そしてこの教育資料ということに関連して、どういう方法で、どういう人達のために図書を購入するかということと別の原則として、「収書資料はその内容・表現・体裁の点で質的に高い基準のもでなければならぬ」という。その著者と主題の権威性、事実の正確さ、効果的な表現、重要性ということを図書選定の基準とするということに外ならない。

同じようなことを図書館活動における図書利用法と結びつけて考察して見るためには、アメリカ図書館界でいわれているものを一応注意しなければならない。

A L A の「公共図書館奉仕」(Public library service)<sup>③</sup>で述べている図書の利用法は次の如くである。

- (1) 知識の増進に貢献すること
- (2) 個人的、社会的福祉を増進するための余暇利用
- (3) 芸術作品を鑑賞し、楽しむこと
- (4) 創造的、精神的能力をのばすこと
- (5) 仕事面での能力増進
- (6) 政治的、社会的義務をはたす
- (7) 家庭および地域社会でのよりよき一員となる
- (8) あらゆる学問の分野の進歩に歩調を合わせること
- (9) たえざる自己教育

これは公共図書館の奉仕活動の目的であると同時に公共図書館における図書利用の目的でもある。それらの一々を図書選択の条件に結びつけると、(1)インフォメーションの提供する図書 (2)教養のための図書 (3)レクリエーションの図書といった図書の種別を利用目的の側から一応規定することが出来る。

インフォメーションを提供する図書は(1)(5)(6)(7)(8)に必要であり、教養のための図書は(2)(3)(4)(6)(7)(9)に必要であり、レクリエーションの図書は(2)(3)に必要であると云い得るが、それが教養のための図書の目的にも配当され得る。教養の

ための圖書の利用の目的とインフォメーションの圖書の利用目的には、その何れにも相当するものがあり、これは利用者の要求により変るものであり、前には思想とか、宗教、哲学といった学問の領域を目的無しに読書することを、教養のための読書といったのであり、現在に於ても一部にはそれと何等変りないが、すすんで政治、経済、社会等の部門にもその要求は向けられていて、知る自由を求めて教養の読書がなされていることも否定されない。それは逆の点から見るとインフォメーション提供の圖書を利用することと余り違わないということになり、たえず動いて行く。現在の図書館或いは図書はインフォメーション提供が中心になり、知識・情報の伝達を強く主張する傾向にあり、目的は即効的と持統的の相違はあっても、図書自体は共通であり、区別することが困難なものもある。しかもそれら一々の図書がインフォメーション提供の図書選択の条件に向って動いているといえよう。しかもそこにどれだけ動いても、インフォメーション提供の図書選択の条件に相応しないものが、残され蓄積されそれらを含めた新しい価値をその文化環境の中に於いて考察し、それが伝達されて行くということになる。

- ① 弥吉光長著 新稿圖書の選択 八一—一四頁、日本図書館協会編 図書館ハンドブック(増訂版) 一九五—一九六頁
- ② P. Butler: An Introduction of Library Science. p. 29—30.
- ③ M. D. Carter & W. J. Bonk: Building Library Collections. New-York, 1959.
- ④ 小野泰博訳 蔵書の構成 一四頁  
前記 一二頁
- ⑤ 弥吉光長著 新稿圖書の選択 六〇—六一頁  
インフォメーションの目的は即効的であり、教養の目的は持統的であるという説にしたがう。(前掲書 六二頁)